

私はシャルリではない

January 08, 2015

By The Saker (Information Clearing House)



「私はシャルリだ」——シドニーのフランス人共同体、市街中心で、Jan 8, 2015 (RT より)



「我々はみなシャルリだ」——パリ証券取引所にて、Jan 8, 2015 (RT より)

よろしい、はっきりさせよう。私はムスリムではない。私はテロには反対だ。私は死刑制度さえ支持しない。私は Takfirism (イスラム過激派) を嫌悪する。私は、政治的または倫理的な主張の手段としての暴力に反対する。私は、批判的言論やユーモアを含めて、言論の自由を心から支持する。

しかし今朝、私は絶対に「シャルリではない。」

実のところ私は、フランスでの殺人についての集団的偽善の病的な見せびらかしに、嫌気がさし胸が悪くなっている。ここにその理由を述べる——

「ダーウィン賞」もののシャルリ・エブド（風刺新聞社）

シャルリ・エブドの人たちは、招いたものを受け取った。私は2012年9月、彼らが予言者モハメッドのあの有名な風刺画を発表したとき、こう書いた——「言わせてもらうなら、これはダーウィン賞に値する。傑作だ。フランス“上流左翼”の“遺伝子プール”はかなり浄化が必要だ。」きょう私はこの立場を変える気はない。

http://en.wikipedia.org/wiki/Darwin_Awards

（注：「ダーウィン賞」とは、自分の命や生殖能力を絶つことによって、人類進化に寄与した人に与えられる賞のこと）

ちょっと考えてみていただきたい：——例えば、列車のレールを枕に昼寝をすることに、どんな意味があるのか？ あなたは、あなたを轢き殺すかもしれない列車と“合意する”必要はないが、やはり轢き殺されるだろう。ではないか？ 特別に何かを主張するために、レール上で昼寝をするとしたら？ その列車が悪い奴だと証明するため？ それに挑戦するため？ からかうため？ ——これは愚の骨頂ではなからうか？ にもかかわらずシャルリ・エブドがやったことは、まさにそれに他ならない。私はこれは、“ムスリム列車”を挑発して自分たちを轢き殺させることによって、カネを儲けるシャルリ・エブドの方法だった、とさえ言いたい。



あなたは私が誇張していると思うだろうか？ この漫画をご覧になるといい。これは、きのう殺された人たちの一人がネット掲載したばかりのものだ。この文句はこう言っている：「フランスではまだテロ攻撃がない——待ってろ！ 1月の終わりまでにきつと願いを叶えてやる。」この絵のクレージーな男は、カラシニコフ銃を背負い、アフガンの“パコル”を着ているが、これはシャルリ・エブドの世界では“気違いムスリム”の典型である。愚かな挑発にも程がある…。

「人々の魂に唾を吐きかける」

ロシアには「人々の魂に唾を吐きかける」という表現がある。これがここでは完全に当てはまる。世界中のムスリムが、それについては曖昧の余地なく、はっきりした態度を取る。彼らは冒涇ということを、きわめて真剣に受け止める——予言者の名やコーランに対する冒涇だ。もしあなたが一人のムスリムを本当に怒らせたければ、彼の予言者と彼の聖書を嘲笑すればよい。これは秘密などではない。シャルリ・エブドが予言者の例の風刺画を発表したとき、そして故意に無礼な挑発的なやり方で彼を嘲笑したとき、彼らは自分が何をしているかがわかっていた——彼らはきわめて意図的に、世界中の16億のムスリムをカンカンに怒らせていたのである。しかもイスラム教では、冒涇は、死をもって罰せられる犯罪だと私は言わなかったろうか？ そこで実際に起こったのは、16億のムスリムのうちの3人が、正義の執行を自分の手に引き受けて、きわめて意図的な冒涇的フランス人を殺したということだ。人は別にムスリムでなくても、そして冒涇に対する死刑を容認できなくても、こうなるのは必然的であり、それは宗教としてのイスラム教に関係がないと理解できるだろう。16億人もの規模のどんなグループでもよい、怒らせてみるがよい。あなたは遅かれ早かれ、暴力を用いて代価を払わせようとする者を1人から5人くらいは、見つけるだろう。これは統計的な必然性である。

犠牲者のある者たちは他の者よりも平等？

そういうわけで、12人の意図的に“魂に唾を吐きかける冒涇者”が殺され、フランス全国が深く喪に服した。世界中のメディアが、これを惑星的災難であるかのように見せることに成功したので、世界中の何千何万の人々が「私はシャルリだ」と言い、すすり泣き、ろうそくを灯し、言論の自由に対して“勇氣ある”態度を取っている。

私に言わせれば、これは“ワニの涙”だ。

事実を言えば、アングロ・シオニストたちが、過去何十年間、Takfiri（過激ムスリム一派）

を丹精込めて育て、組織し、武器を与え、財政援助し、訓練して装備させ、指図までしてきたのである。今日、アフガニスタンからシリアまでの戦争において、これらの殺し屋サイコパスたちが、数十年の間、アングロ・シオニスト帝国の歩兵になっている。しかし明らかに、アフガニスタンにおける、ボスニアにおける、チェチュニア、コソボ、リビア、クルディスタン、イラク、その他における、彼らの手で殺された人々のことは、誰も気に留めていない。



「帝国」の自由戦士

そこでは、これら肝臓を食う殺し屋どもは“自由戦士”であり、十分な支給を受けている。そこには、今日、シャルリ・エブドのために喪に服している、まさに同じメディアからの支給も含まれる。明らかに、西側のエトス（精神風土）では、ある犠牲者は他の犠牲者よりも平等であるらしい。

そしてヨーロッパの誰かが、ドンバスで行われている無実の人々の毎日の殺人——西側政府によって支払われ、直接、指令されている——に、一滴でも涙を流した最後の日は、いつだった？

彼らは我々を、どんな愚か者と考えているのだろうか？

更にこういうことがある。どんなあきれた愚か者であっても、シャルリ・エブドがこの種の攻撃の第一の標的であることは知っていた。そして断言するが、フランスの警官はあきれた愚か者ではない。ところが何かの理由で、彼らはその日、どこにも見当たらなかった。ただ2人（か1人）の警官の乗った一台のライトバンが、近くに駐車しており（決してテロ対策のものではなかった）、一人の警官が撃たれ、彼が命乞いをしている間に、頭にAKショット弾を撃ち込まれて処刑された。これがフランス国にできる精一杯の対策だった？

それはありえない。

ではここで何が起きているのか？ 私はあえてこう言おう——EUの1%の者たちが、今、これらの殺人に付け込んで、彼ら自身の人民の嚴重取り締まりを始めようとしている。サルコジはすでにオランダと会い、彼らは、新しいレベルの堅固さと警戒が布かれなければならないことに合意した。これはフランス版9・11の匂いがしないか？

それで断じて今朝、私はシャルリではない。そして私は、“上流左翼”グループに迎合する、何重もの善意らしい“連帯精神”の、いかがわしい見せかけには、口に言えないほど嫌悪を感じている。このグループは、何十億の人々の魂に唾を吐きかけることでカネを儲け、彼らに何ができるかやってみよと挑戦している。そして私は、フランス政府がこのすべてを工作したか、起こるがままに放置しておいたか、それとも少なくとも、これを最高限に政治利用することで、明らかに誰かの利益になっていることについて、全く疑いをもっていない。

しかし中でも私が最も嫌悪を感じるのは、こうした運動をしながら、このことについて正しい問を發するのを一生懸命避けている、すべての人々に対してである。彼らはきっと全員が“シャルリ”なのであろう。

私はそうではない。

(The Saker のブログは、<http://www.vineyardsaker.blogspot.com/>)